

書

評

『サステイナブル・コミュニティ』

川村健一+小門裕幸著 学芸出版社 定価2575円 257頁

千代崎 一夫 (住まいとまちづくりコープ)



「サステイナブル・コミュニティ」—持続可能な都市のあり方を求めて—アメリカの新しい町づくりの考え方の紹介と日本のまちづくりを考えようとした本です。

第一章はアメリカの町づくりクオリティ・オブ・ライフを求めて—としてアメリカの植民地時代から現代のまちづくりとしてのエッジシティとその限界。

第二章ではサステイナブル・コミュニティの実績といくつかの地域の実例を紹介しています。

第三章ではサステイナブル・コミュニティの思想を三人の建築家が語り、理念と要素を拾い出しています。

第四章はリージョン—ポートランド「メトロ」の挑戦として、コミュニティからリージョンへとして狭い地域（コミュニティ）だけでは解決できない問題を、複数のコミュニティからなるより大きな地域（リージョン）での解決が必要だと述べられ、さらに「地域政府「メトロ」、地方政府の枠を越えた地域政策」という考えも提起されています。

第五章では日本型サステイナブル・コミュニティに向けて日本での町づくりについての提言をしています。

サステイナビリティについての具体的な4つの段階や2つの理念「強いコミュニティの創造」「サステナビリティの追求」や7つの要素「アイデンティティ」「自然との共生」「自動車の利用を削減する交通システム」「ミックストユース」「オープンスペース」「画一的ではなく、色々な意味での工夫された個性的なハウジング」「省エネ」「省資源」にまと

められていることなども含め繰り返し、事例とチェック項目紹介が載っていることも分かりやすい本と評価する理由になっています。

カタカナばかり多い本ですが、道路に沿って周縁部に形成された新たな都市をエッジシティと名付けていることなども含め、それだけ日本語にない概念がたくさん紹介されているわけとうなずけます。

しかし、五章の1) アメリカから学ぶべき事、2) ハード中心のまちづくりからの脱却、3) 防災の観点からでは、なんとか日本でのまちづくりの提起をしようと試みているのですが、少しものたりません。

例えば「神戸大地震で5,500人の人命が奪われたのに対し、ロスアンゼルス大地震では10数名に止まった……」との記述の部分では、5,000人も人命を直接奪った本当の原因である「住宅」の問題には触れていません。

「防災とはハードの強化も重要であるが、むしろ耐震度合について住民合意・住民理解を得ることである……しかし限界強度の増加に対してコストが2倍3倍と高くなるようでは困る」ともあるが、これでは同じ地震があれば、どこでも同じ被害が出てしまうでしょう。人命は何物にも換え難いものです。住まいが凶器になるような事態は絶対避けなければなりません。それが阪神淡路大震災の教訓です。

この本は、アメリカのまちづくりの歴史と新しいシステムの一部を知るには良い本だと思います。アメリカの例を学ぶために使い、次の問題の「日本でまちづくりをどうするか」ということは、読んだ人自身が一人一人考えることと、集団で高めていくことをしなければならないと思います。そのためには、大きな努力がさらに必要です。